

## ランコーを極める

山形県尾花沢市立尾花沢中学校

二年 本間 遼 平

「リード、オッケー。ゴー！」

この一声で走者が進塁に成功すれば

「よっしゃあ！」

と思う。監督の指示はもちろんだが、走者にリードを促し、ゴーサインを出せるのは、ランナーコーチャーの特権だ。最近この「ランコー」がおもしろくて仕方ない。

部活動も三年生が引退し、いよいよ僕たち二年生中心の新チームが始動した。八月六日、七日に行われた地区大会では、準優勝という好成績だった。なかなかいいチームになってきていると思う。僕もベンチ入りすることができた。しかし、スターティングメンバーに入ることはできなかった。

一年前、好きでたまらず、苦勞するのは覚悟の上で入部した野球部。練習最初のランニングすらまともについていけなかったあの頃に比べれば、自分でもずいぶん進歩していると思う。けれど、まだまだだ。他の人に比べれば、足は遅く、走れないし、自分より上手なチームメートはたくさんいる。スタメンに入れないのも仕方ないことだと納得している。今はファーストの守備練習をしているが、その中でも二番手、三番手。あきらめているわけではな

いが、一番手になることはちょっと厳しいかなと感じている。それでもやっぱり、ベンチの中だけにいるのはつまらない。ベンチから応援することも重要なことだが、前線でプレーしているチームメートに、少しでも近い場所で一緒に野球がしたいとずっと考えていた。

大石田中学校との練習試合の時だった。監督の一声。

「誰かランコー行け。」

どうせ自分には打順は回ってこない。すかさずヘルメットをかぶり、ファーストのランナーコーチャーに向かった。その時は正直、ランナーコーチャーがどういふ役割をする仕事なのかよくわかっていなかった。単に、走者が前に進めるように声掛けするだけだろうと思っていた。そんな状態だったから、大きな声を出せなかったし、走者であるチームメートも自分の声など聞いてくれないのではないかと自信もなくて、まともに役割を果たすことなどできなかった。でも、やっているとうちに、走者ではきつと気づけないだろうちよつとした動作など、相手チームのピッチャーの癖を見つけることができた。

それからなんとなくランコーが楽しくなり、ファーストランナーコーチャーの役割を調べてみた。

- ① バッターをセカンドに進めるか、ファーストでストップさせるか判断し指示する。
- ② ボールの所在を把握する。
- ③ 相手守備位置の確認。
- ④ けん制の有無の指示。
- ⑤ アウトカウントの共有。
- ⑥ 走塁への意識の共有。
- ⑦ セカンドランナーへのけん制の警戒。

こうして書いていくと、こんなに難しいことなのかと思える。もちろん監督の指示あつての行動である

が、バッターを進塁させるかどうか瞬時に判断し、チームの勝利につながるができるか、責任重大な仕事だ。また、やっているとうちに、ベンチとは別の角度からグラウンド全体を見渡すことができる最高の特等席だということにも気づいた。ここが自分の居場所だ、誰にもゆずりたくない、負けたくないと思つた。

それからの試合では、積極的にファーストランナーに出るよう心がけている。日々の練習でも、ランナーのやり方を丁寧に指導してもらつた。徐々に大きな声でリードできるようになり、相手チームの癖に気づくこともある。だが、ランコーとして監督やチームメートに認めてもらえるにはまだまだだ。保護者席からも、

「ランコーしつかり！」

と叱咤激励の言葉が常に飛んでくる。特に母の声。自分子どもにどれだけ厳しいのかと思うが、ランナーとしての自信はまだ弱いから仕方ない。

ランナーであるチームメートが、自分より野球がへたくそな奴の言うことなど聞いてくれないのではないかと不安になることがある。どうしたら信頼してもらえるようになるか、自分なりに考えて実行していることがある。バッターに声を掛けることだ。出塁、進塁に成功したら「ナイスバッティング。ナイスラン。」惜しくもアウトになつてしまつたら「ドンマイドンマイ。」と。この行為が信頼につながるのかどうかかわからないが、何もしないよりはまじだと思つている。

今後の目標は、もちろんプレーヤーとしてレギュラーを目指すこと。でもその前に、チームの誰からも信頼され、「ファーストランナーは本間だ。」と言われるような名ランナーになつてみせる。

### 作文を書くに当たって

ポジションにこだわらず、広いグラウンドを見回して、自分に何ができるかを考えることが大切。プレーヤー以外でも輝ける場所はある。